

平成 25 年度兵庫県高齢者学習研究協議会 全県研修会

□ 演題 「高齢者学習のニーズとカリキュラム作成～受講者と提供者間で起こり得るギャップの発生を避けるために～」

□ 講師 上田 博司（大阪大学大学院人間科学研究科講師）

日 時：平成 25 年 9 月 30 日

場 所：嬉野台生涯学習センター

○ 上田博司 講師

皆さんおはようございます。先ほど御紹介にあずかりました、大阪大学大学院人間科学研究科の上田と申します。本日はよろしくお願いいたします。

**高齢者学習のニーズとカリキュラム作成
～受講者と提供者間で起こりうる
ギャップの発生を避けるために～**

兵庫県高齢者学習研究協議会・全県研修会

平成25年9月30日

上田博司

ただいまよりお時間をいただきまして、「高齢者学習のニーズとカリキュラム作成～受講者と提供者間で起こり得るギャップの発生を避けるために～」と題したお話をさせていただきます。本日のレジュメにつきましては皆さん既にお持ちだと思いますが、左上から下に行き、また右上に上がるというふうに見ていただければ幸いです。お手持ちのレジュメはまとめておりますので、必ずしもスクリーンのスライドとマッチしないときもございますが、内容的には全て網羅していると思いますので、よろしくお願いいたします。ただ、字が多少小さいということもございますので、もし不明なところなどございましたら、後ほど確認のために私のほうに言っていただければと思います。

まず最初に、先ほど紹介をいただきましたように、私は「老年学」というものを海外で学んでまいりました。そこで、ちょっと皆さんにお聞きしたいのですが、「老年学」は何か御存じの方ちょっと挙手いただけますか。ありがとうございます。ほとんどの方がいらっしゃらないようですね。最初にこの老年学のことについて、2枚ほどスライドを使って簡単に御説明させていただきます。この老年学、英語でジェロントロジーと言われますけど、これは加齢現象によって起きる個人のさまざまな身体の変化であったり、高齢者を人口学的に見ました社会的変化、そういったものを包括的に研究する分野です。

学問といたしましては、皆さんもよくお聞きする心理学や社会学と比べますと、まだ100年ぐらいの歴史しかない新しい学問でございまして、老年学は、高齢化が進んでいる現在社会のなかで多種のいろいろ細分化された学問を再統合するというような流れで発生した学問でございます。従いまして、老年学は学際的、多面的、総合的

な学問として捉えられております。

老年学(ジェロントロジー gerontology)とは

全ての人が経験する加齢という現象によって起こる
個人の様々な身体の変化、
および
高齢者の人口増加によって起こる社会的変化を
実証的に究明する学問

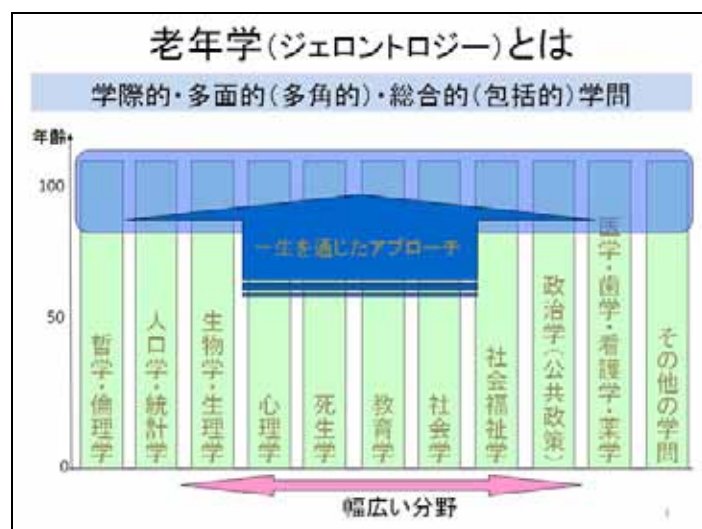
まだ100年余りの歴史しかもたない新しい学問

老年学は現代の様々な細分化された学問を
再統合する歴史的な役割を担って登場

学際的・多面的(多角的)・総合的(包括的)学問である



私がアメリカに留学した当時は、3つほどしか博士課程をもつ大学がございませんでした。現在の社会におきましては、高齢者のニーズは生涯教育も含めてあるんですが、サービスだけではなく、学問としての老年学は余り認識がないというように思われます。老年学は、哲学、倫理学、人口学、生物学、生理学、心理学、それから死生学、皆さんと関わりのある教育学、社会学、社会福祉の問題、政治学、医学など、数多く幅広い分野が含まれております。これらの分野で高齢者に焦点を当て、また一生を通じたアプローチとして老年学というものがあります。

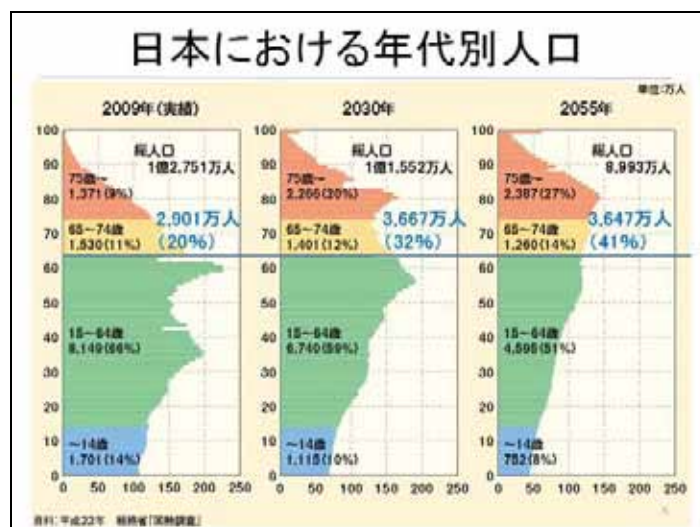


それでは、本日メインの内容に入っていきたいと思います。アウトラインとしましては、日本における人口の高齢化、それから超高齢化社会における課題、それらに対する政府のビジョンを見ていきたいと思います。それから高齢者の社会参加、学びについて見ていきます。そこで、個々の学習における知性、記憶、コミュニケーション、そういったものにも焦点を当てて少し話したいと思います。その後、生涯学習・教育、あと教室のセッティング等についてもお話させていただきまして、最後のほうは、皆様の関心が高いかと思いますが、生涯教育を担当されてる方々のカリキュラムの作成、そういったものについて、簡単ではありますがもお話させていただきます。

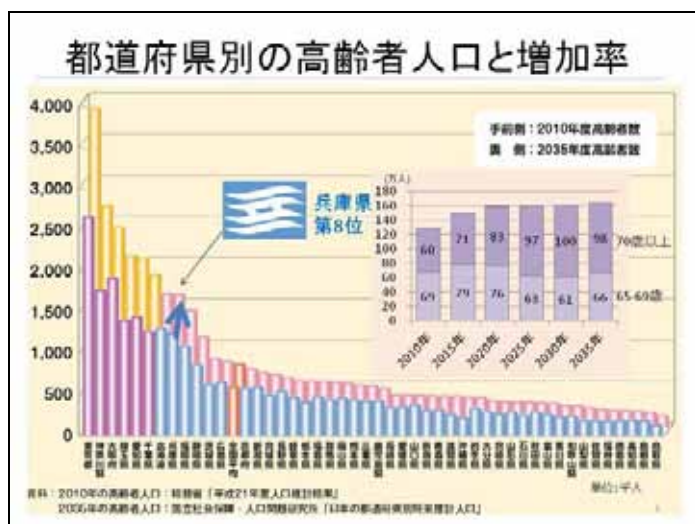
アウトライン

- 日本における人口の高齢化
- 超高齢社会における課題: 政府のビジョン
- 高齢者の社会参加・学びについて
- 学習における知性・記憶、コミュニケーション
- 生涯学習・教育
- 学習内容や状況に応じた教室の設定
- 生涯教育担当者、カリキュラムの作成について

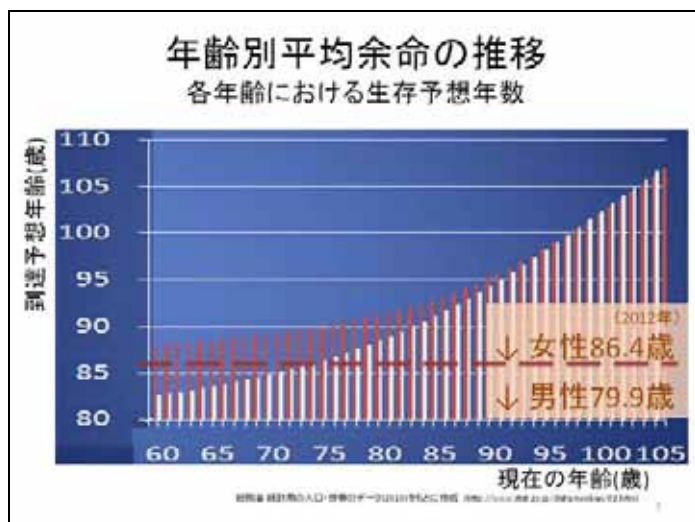
日本における高齢化といいますと、先ほど話の中にありましたように、2013年の時点で日本の65歳の高齢者というのは人口の4分の1、25%を占めております。それが2030年になりますと、もう30%ぐらいになりまして、さらに2055年になりますと41%、すなわち高齢者が4割を超えるということになります。皆さん御存じかと思いますが、日本の100歳以上の高齢者は既に5万人を超えております。ですので、高齢者といってもかなりの年齢幅が出てきますので、生涯学習におきましても、いろいろな年齢層の方々が含まれるということを考える必要が出てきます。



これは全国の都道府県別の高齢者の人口と増加率について、2010年と2035年の推計について示したスライドですが、兵庫県を見てみますと第8位になっております。人口の高齢化ということで、兵庫県も他県と同様、人口の高齢化が進んでいきます。高齢者の中でも特に年齢の高い方、そういった方々の人口が数も比率も増えると考えられますので、現在の高齢者教育のアプローチが実際にそのまま将来当てはまるかどうかということについては、再考していく必要が出てくるかと思われます。



60歳以上の各年齢の平均余命を表したものがこちらグラフになりますが、昨年の日本の平均寿命を与えてみますと、その年齢に達してからさらに長く生きていらっしゃる、健康でいらっしゃる方という高齢者は増えています。皆さん健康寿命ということを知ったことあるかと思いますが、健康な状態を維持した人がどれぐらい生きながらえるかということ、障害がないとか病気でないというような年数がどれぐらいあるかということになります。こういった人たちが時間の余裕があれば積極的に生涯学習や社会参加をする可能性があるかと思われます。



健康ということを考えた場合に、「サクセスフルエイジング」や「アクティブエイジング」という言葉がよく出てきます。これらはよく似た言葉ではあるんですけども、サクセスフルエイジングに関しましては、年齢とともに身体の老いを認識しつつ、それを許容しながら、主観的幸福感を維持して社会生活に適応させていくという意味合いがあります。アクティブエイジングに関しましては、肉体的に活動的であるとか、労働力としての参加というだけではなくて、社会の中、経済、文化、精神、そういったものへの持続的な参加というものを意味します。このような概念が今後の社会で非常に大切になってくるかと思われます。

サクセスフル・エイジングの概念

年齢とともに、身体の老いを認識しつつ、これを許容しながら主観的幸福感を維持し、社会生活に適応しながら、豊かで健康な老後の生活を営むこと

アクティブ・エイジングの概念

単に肉体的に活動的であるとか労働力としての参加というのではなく、社会、経済、文化、精神、市民の関心事への継続的な参加を意味する

日本の超高齢社会における課題といたしましては、平成24年版の高齢社会白書で6つの課題を挙げております。まず1つ目は高齢者の実態ととらえ方ということで、65歳以上の高齢者というものが、概念的に社会に支えられる立場というふうに考えられがちですが、実際は健康な高齢者が非常に沢山増えてきています。ですから、そういった既成概念から脱却することが非常に大切になってきます。

2つ目は世代間の格差、世代内の格差ということで、社会格差という言葉が近年よく使われていますけども、異なる世代や同世代の中での格差が指摘されてきております。収入の格差であったり、学習経験や生活レベルの格差が存在していることが課題になっております。

3つ目に、高齢者の満たされない活動意欲といたしまして、社会参加、特に定年を迎えたときに、一般社会のニーズの中でどういった貢献ができるか、それからコミュニティとつながっていくか、そういったものが大切になってきます。

4つ目として地域力や仲間力の弱さが高齢者の孤立化につながってきますので、現在も対応されていると思いますが、将来、高齢者生涯教育の中でどういうふうに生かしていくかということが課題になってくるかと思われます。

5つ目として生活環境、これは毎日の生活の中でいろいろなトラブル、特に最近よく出てくるのは、詐欺に遭ったり、認知症の患者もかなり沢山増えてきていますので、その人たちがいかにコミュニティの中で問題なく生活していくか、そういったことが大切になります。高齢社会を支える人たちを育成していくということも大切になってくるかと思われます。

6つ目としてこれまで人生65年時代ということが言われてきましたけれども、平均寿命の伸びとともに100歳人口もかなり増えてきている超高齢化の時代において、高齢者という枠組みそのものを考えていく、65年時代から人生90年時代さらに100年時代、そういったものも考えていく必要がでてきます。

超高齢社会における課題

平成24年刊 高齢社会白書(概要版)より

- (1)「高齢者」の実態と捉え方の乖離
 - ・ 社会で活躍してきた「団塊の世代」の超高齢社会を先導する役割への期待
 - ・ 従来の「65歳以上高齢者」への支えが必要であるとする固定観念からの脱却
- (2)世代間格差・世代内格差の存在
 - ・ 世代間格差、世代内格差が拡大しないようするためのバランス
 - ・ 意欲と能力のある65歳以上の者に、社会を支えるという立場を保つ必要
- (3)高齢者の満たされない活躍意欲
 - ・ 高齢者の社会における活動意欲をいかにして満たしていくのか
- (4)地域力・仲間力の弱さと高齢者等の孤立化
 - ・ 都市での高齢化、単身高齢世帯の増加の中で、地域社会で社会的孤立や孤立死への対応、人々の新たなつながり
- (5)不便や不安を感じる高齢者の生活環境
 - ・ 地域が一体となった環境整備(移動、トラブル回避、認知症等)
- (6)これまでの「人生65年時代」のままの仕組や対応の限界
 - ・ 健康管理、社会参加、生涯学習など、若年期から高齢期に向けた準備
 - ・ 「人生65年時代」から「人生90年時代」への移行

今後の超高齢化社会の課題に向けた基本的な考え方といたしましては、高齢社会白書では6つの考え方を提示しております。

今後の超高齢社会に向けた基本的考え方

平成24年刊 高齢社会白書(概要版)より

- (1)「高齢者」の捉え方の意識改革
～65歳は高齢者か～
- (2)老後の安心を確保するための社会保障制度の確立
～支え支えられる安心社会～
- (3)高齢者パワーへの期待
～社会を支える頼もしい現役シニア～
- (4)地域力の強化と安定的な地域社会の実現
～「互助」が活きるコミュニティ～
- (5)安全・安心な生活環境の実現
～高齢者に優しい社会はみんなに優しい～
- (6)若年期からの「人生90年時代」への備えと世代循環の実現
～ワーク・ライフ・バランスと次世代へ承継する資産～

まずは、高齢者のとらえ方ですが、その意識改革が必要になるのではないかと考えられています。2つ目に、老後の安心を確保するための社会保障制度が必要になってきます。それは公的支援だけではなく、共助という形でお互い助ける、もしくは世代を超えた助けが必要になってくると考えられます。3つ目として高齢者そのもののパワーというものも期待されておりまして、必ずしも全ての高齢者イコール障害を持たれているとか病気であるというわけではありません。そういった健康な高齢者の方々を社会の中、コミュニティの中でいかに活用していくかということです。希望があれば再雇用とかアルバイトのようなパートタイムというかたちで働いていただくということもあるかと思います。消費者でもあるそういった方々を支援するためにシルバー産業や市場が、企業だけではなく高齢者とともに商品開発していく、そういったことも出てくるかと思われます。

今後の超高齢社会に向けた基本的考え方 (1/2)

- | | |
|---|--|
| <p>(1)「高齢者」の捉え方の意識改革
～65歳は高齢者か</p> | <p>・「高齢者」に対する固定観念を变革し、認識と実態の乖離を解消し、意欲と能力のある65歳以上の者には支える側にまわってもらう意識改革を行う</p> |
| <p>(2) 老後の安心を確保するための社会保障制度の確立
～支ええられる安心社会</p> | <p>・社会保障制度を中心とした公助と共助のあり方について、「全世代対応型」の持続可能な社会保障制度の構築</p> |
| <p>(3) 高齢者パワーへの期待
～社会を支える頼もしい現役シニア</p> | <p>・65歳以上のシニアの仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)を考慮に入れた柔軟な働き方の実現
・高齢者のニーズを踏まえたサービスや商品開発の促進によるシルバー市場の開拓と活性化</p> |

11
平成24年6月 高齢社会四書(概要版)より

4つ目に、互助が生きるコミュニティといたしまして、地域で生活する高齢者の方々がどのようにサポートしあっていくか。その中で、バリアフリーやユニバーサルデザインといった概念が非常に必要になってくるかと思われます。シニアマーケットにおいてバリアフリーやユニバーサルデザインは非常に大切ですが、高齢者用に特に開発したものを高齢者用としてそのまま紹介することは、市場においてなかなか受け入れられない傾向にあります。私は高齢者じゃない、そういったことは言ってほしくないのが高齢者向けと書かれた商品は買わない、そういったこともございます。ですので、生涯教育についても、特に高齢者だけを対象に企画したというわけではなく、中高年というような幅広い年齢層を考えてカリキュラムを作成することも必要になってくるかと思われます。次に、犯罪や消費者トラブルからの保護も含めて安全・安心な生活環境ということも大切になってくるかと思われます。また長い人生の中で、仕事と生活のバランスや次世代への資産継承ということを考える必要が起きてくるかと思われます。

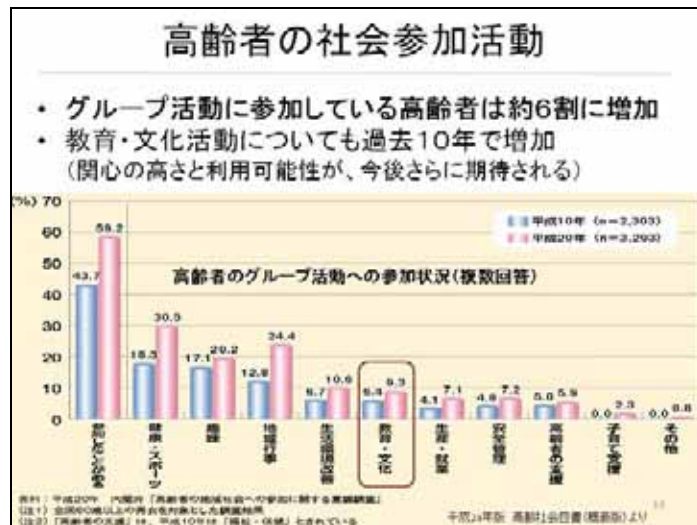
今後の超高齢社会に向けた基本的考え方(2/2)

- | | |
|---|--|
| <p>(4) 地域力の強化と安定的な地域社会の実現
～「互助」が活きるコミュニティ</p> | <p>・地域の人々、友人、世代を超えた「互助」によるコミュニティの再構築と地域包括ケアシステムの推進</p> |
| <p>(5) 安全・安心な生活環境の実現
～高齢者に優しい社会はみんなに優しい</p> | <p>・バリアフリー・ユニバーサルデザインの推進による日常生活圏域の生活環境の保障
・犯罪・消費者トラブルからの保護及び成年後見等の拡充</p> |
| <p>(6) 若年期からの「人生90年時代」への備えと世代循環の実現
～ワーク・ライフ・バランスと次世代へ承継する資産</p> | <p>・ワーク・ライフ・バランスを通じた人的資本の蓄積とその活用
・資産形成とその活用による安定した老後生活の実現</p> |

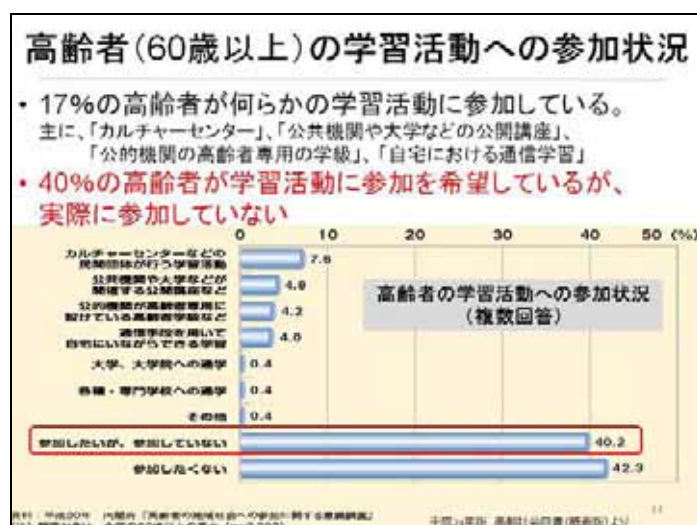
12
平成24年6月 高齢社会四書(概要版)より

高齢者の社会参加というものが、実際にどういう状態かというものを、高齢者白書の中で平成10年と平成20年を比較して見てみたいと思います。高齢者のグループ活動への参加状況ですが、最近の平成20年の中では増加が見られ、凡そ6割ぐらいが何らかのグループ活動に参加していると報告されています。健康・スポーツなどに始まり、趣味であったり地域行事、生活環境改善とかいうふうにあります、教育・文

化というのは、大体10%近くの参加がございます。ですので、現状が大体これぐらいということは、将来の生涯学習への参加者が、数にしても割合としても増えてくることが予想されます。

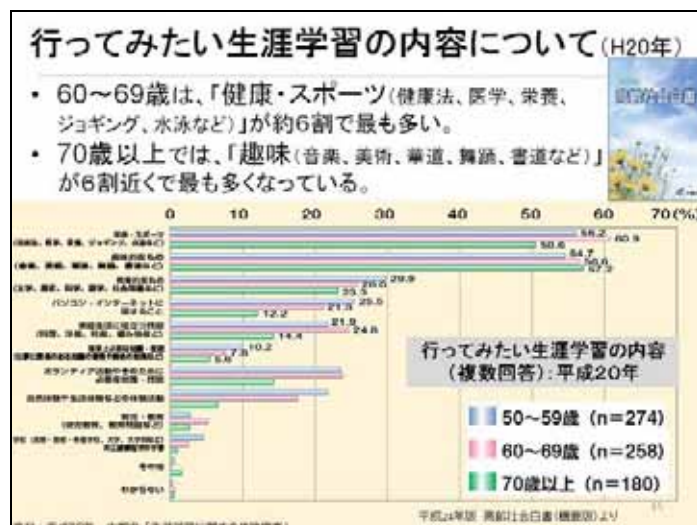


60歳以上の高齢者の学習活動への参加状況について見てみますと、複数回答も含まれていますが、大体17%ぐらいの方々が何らかの学習活動に参加されているようです。カルチャーセンターなどの学習活動であったり、公共機関、大学などがする公開講座、また、自宅にしながら講義を聴ける放送大学も含まれています。注目したいのは、参加したいが参加していないという割合が非常に高く、40%ぐらいいらっしゃいます。理由はいろいろあるのですが、実際に生涯学習などの学習活動に関しまして、その情報がきちんと届いてないこともあるかと思われます。恐らく、皆さん生涯学習の案内をされる時は、市の広報であったりインターネットを通じたりで情報をたくさん流しておられるかと思いますが、一般的な情報の流し方もございますし、例えば病院の待合いで健康に関する講座をやってますよ、というようなピンポイントのアプローチも実際に必要になるかもしれません。参加したいが参加していない、そういったところがどこであるのかわからない、いつあるのかわからない、そういった人たちに適切に情報を提供できるアプローチを考えていく必要があるかと思われます。

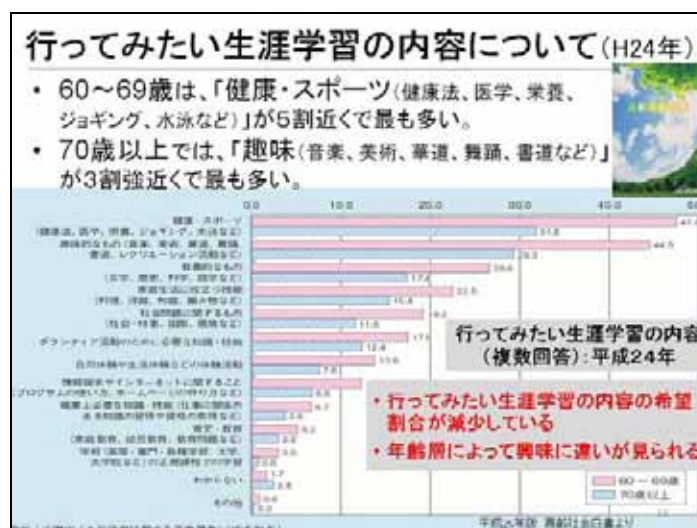


では、平成20年の調査で、生涯学習でこういったものを学びたいと考えているかということ、50歳代、60歳代、70歳以上の10歳ごとの年齢層で見てみます

と、60歳代の大体6割が健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳などという健康・スポーツを学ぶことを希望されているようです。70歳以上になりますと、もちろん、スポーツ・健康も継続的にずっと興味をお持ちですが、どちらかという趣味といったものに興味をお持ちのようです。



同じく生涯学習の内容について平成24年の報告を見てみると、先ほどの平成20年の調査報告と比べると、行ってみたい生涯学習の内容に関して同年代であっても若干の違いが見られます。これはいろいろな理由があるかと思いますが、生涯学習の内容が多様化してきているので、参加者が分散しているということも考えられます。年齢層による違いや男女差というものも出てきますので、皆様ご担当の学習提供の場において、年齢層や性別を考慮に入れて調整する必要も若干出てくるかと思われます。最初に言いましたように、人口学的に見たときに、将来の人口の構造変化が生涯学習の中で、ニーズの変化とともに変わってくる可能性があるかと思われます。



団塊の世代だけに焦点を当てて、今後参加したい社会活動というものをみると、趣味・スポーツ関係、そういったものが非常に多いようです。これは60歳代の方々が健康に関して興味を持っているものを反映するかと思いますけども、社会活動に参加したいと希望する人たちもある程度高い割合でいらっしゃるの、そういった方々を支援するための学習機会の必要性というものがあるかと思われます。

高齢者の身近な問題: 生活環境について

平成25年版 高齢社会白書より

- (1) 高齢者の住まい
 - ・高齢者の9割は現在の住居に満足、体が弱っても自宅に留まりたい人が多い
 - ・高齢者は家庭内事故が多く、最も多い事故時の場所は「居室」
- (2) 高齢者の居住環境
 - ・約6割の人が地域で不便を感じていないが、買い物(17%)、通院(13%)、交通機関(12%)の問題を指摘
- (3) 高齢者の安全・安心
 - ・高齢運転者による交通事故数の高い推移(2012年: 死亡1,264人)
 - ・振り込め詐欺の8割以上が60歳以上
- (4) 高齢者による犯罪
 - ・過去10年間で刑法犯検挙数が2倍(5万人近く)、うち窃盗犯7割
- (5) 高齢者の日常生活
 - ・生きがいを感じる60歳以上が約8割、充実した生活を送りたい人の増加
 - ・1人暮らしの男性の孤立の可能性(交流の場、信頼できる人の存在)
- (6) 高齢者の自殺
 - ・60歳以上の自殺者(約1万人)、全体の3分の1

生涯教育の目的としましては、これは比較的若い年齢層向けになってしまっていますが、世界のグローバル化のなかで生涯教育の必要性が高く認識されてきています。次に、個人の実行性ということで、自己発展を啓発するものとして生涯教育というものが大切になってきます。地域の中でより活動的に生活をし、一市民として社会に貢献する、そういった中で生涯教育の大切さが再認識されてきます。社会参加という枠組みでは、生涯教育は年齢、性別、社会階級などに関係なく、全ての人が対象になってきています。

生涯教育の目的

- ・ 世界のグローバル化への変化に対応できる知識豊富、技術のある、適応能力のある人材の育成: 現在のところは若者向けのものが多くみられる
- ・ 個人(自身)の実行性: 自己発展への啓発
- ・ 活動的な市民として: 地域で励まされ、地域に貢献し、社会資本に連結するもの
- ・ 社会参加: 年齢、性別、社会階級、国籍、人種等に関係なく、全ての人々を対象

高齢者を対象にした教育、学びの目的としましては、我々も年齢を重ねていくわけですが、生涯を通じてより実践的なものを教育やトレーニングのプログラムをつうじて学ぶための支援が非常に大切になります。

また高齢者に情報技術や健康に関する新しい技術や知識、そういったものを得る機会を提供する必要が出てきます。例えば、高齢者が公共交通機関が余り便利でないので買い物に出ていけないときに、食材や日用品の宅配サービスであったり、宅配弁当サービスの存在や使い方を学ぶような、高齢者のニーズに対応することが出てくるかもしれません。私はアップル社のアイパッド(iPad)を使っていますが、これは大体2、3歳ぐらいから80、90歳ぐらいの方も使えるものとして開発されています。公衆電話の数は年々減ってきていますが、らくらくホンのような携帯電話を持っていれば何か起きたときにすぐに電話を掛けられます。そういった技術も、ニーズに

合わせて生涯学習の中に生活に役立つ情報として含むのも良いかなという気はいたします。

毎日の生活に密着した役立つものとしては、地域の商店街で毎月一回安くセールしてます、そのときに何時ごろが比較的空いていますといった情報の提供というものもできますし、いろいろなかたちで学びということができるかと思われまます。

高齢者を対象にした教育(学び)の目的

- 高齢者が年齢を重ねていくなかで、教育やトレーニングのプログラムや方策を通じて、生涯を通じて学ぶことができるよう支援する
- 高齢者に新しい技術や知識(例えば、情報技術や健康に関する知識)の獲得を得る機会を提供する
- 日常生活や社会生活に役立つ情報の提供

理論的になりますが、ここにライフサイクルというものとライフステージの2つを挙げさせていただいております。ライフサイクルといいますと、生まれてから乳幼児、幼児期、前期・後期、児童期、それから思春期を経て成人、壮年、老年というふうに移り変わっていきますけども、学びを成長のなかで説いたのが心理学者のエリクソンです。一方、ライフステージというのは、人間の一生において節目となる出来事、例えば入学、卒業、結婚、退職があります。就職のステージの後になると、結婚であったり出産と子育て、そういった人生のなかで経験する年齢は実際には違ってきます。単純に年齢ではなく、そういった経験をもとにグループとして対象とした学習を考慮することも大切かと思われまます。

学びの経験の段階・変遷

ライフサイクル (life cycle)

心理学者エリクソンによる発達段階論(ライフサイクル8段階)

- | | |
|------------|-----------------------------|
| 1: 乳児期 | … (基本的信頼 vs 不信) |
| 2: 幼児期前期 | … (自立的性 vs 恥・疑惑) |
| 3: 幼児期後期 | … (自主性 vs 罪悪感) |
| 4: 児童期 | … (勤勉性 vs 劣等感) |
| 5: 思春期・青年期 | … (アイデンティティ vs アイデンティティの拡散) |
| 6: 成人期 | … (親密性 vs 孤立) |
| 7: 壮年期 | … (世代性 vs 停滞性) |
| 8: 老年期 | … (統合性 vs 絶望) |



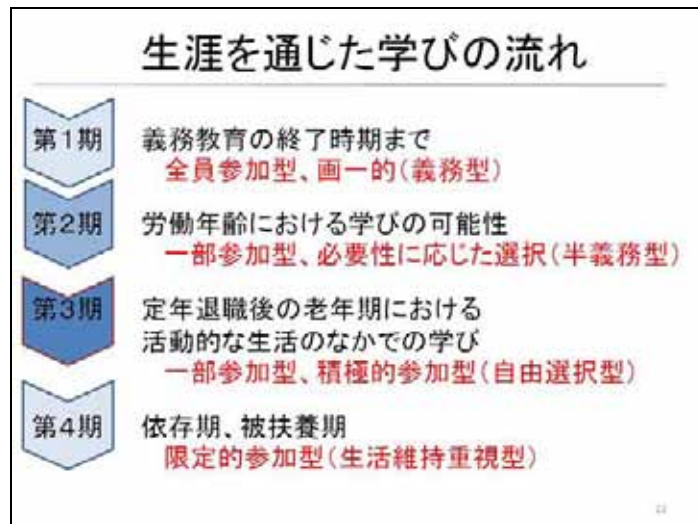
各段階の発達経験が基礎となるので、ピラミッド型でよく表現される。

ライフステージ (life stage)

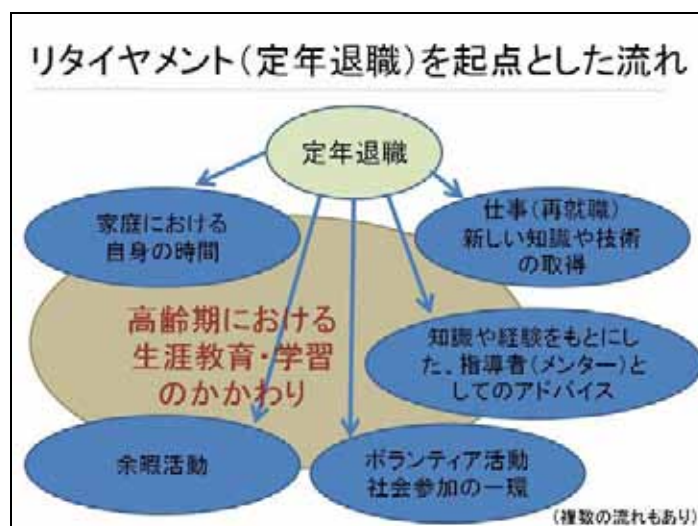
人間の一生において節目となる出来事(例えば、出生、入学、卒業、就職、結婚、出産、子育て、退職等)によって区分される生活環境の段階

生涯を通じた学びの流れというものを大きく分けると、4期ぐらいまでに別れるかと考えられます。第1期は、義務教育の終了や高校卒業、大学卒業ぐらいまでが当てはまります。義務教育や、一概に言えませんが、高い進学率で大学まで進むことが一般的になってきていますので、全員参加型で画一的な教育ですので義務型になります。

第2期は、実際に社会に労働者として出ていった環境における学びの可能性が含まれます。これは、社会のもしくは職場のニーズに合わせて何か資格等を取るとか語学などの勉強をするといったことになります。一部参加型で必要に応じた選択ということで、仕事や自身の学力向上に関係あるということで、半義務型と考えられます。第3期ですが、これが生涯教育で定年退職年齢の高齢者に関しての学びの時期になります。興味のある方が積極的に学び、また社会参加をしたいということで、自由に学びの場を選択していきます。大学の公開講座や老人大学などで学んだりするといったものがこの時期に含まれます。第4期に関しては、生活維持の学びということで、少し特殊なものとなります。



我々は実際に定年退職しましてから、亡くなるまでにかなりの年数を費やすことになります。定年退職後の再就職や知識や技術を生かして何かパートタイムやアルバイトで働くという方もいらっしゃるかと思いますし、家庭で読書などの自分の時間を過ごしたい方もいるかと思います。また余暇活動で社会に出て行って何かスポーツや文化的な活動をされるかもしれません。知識や経験を生かして社会の中で指導者としてアドバイスを行うことも考えられます。それから、ボランティアとしてイベントもしくは社会貢献活動に参加するということも考えられます。高齢期においては、こういった事項に関して多岐にわたって関わる可能性がありますので、高齢者の各々のニーズに対応することが考えられます。



それでは、学習そのものについて、少し専門的になりますが、話したいと思います。
 知能というのは物事を理解したり判断したりする能力、それから問題解決をするような能力というのですが、適応力、思考力、推理力、洞察力を含めた高等な知的能力、もしくは知識や技能を経験によって獲得する学習能力のようなものを知能と定義しております。

知能 (intelligence) について: 定義

- 1 物事を理解したり判断したりする力
- 2 心理学で、環境に適応し、問題解決をめざして思考を行うなどの知的機能 【デジタル大辞泉】

3つの分類

- (1) 適応力。新しい場面や困難な問題に直面したとき、本能的な方法によらずに、適切かつ有効なしかたで、順応したり解決したりする能力
- (2) 抽象的思考力、推理力、洞察力などの高等な知的能力。言語や記号などを用いて、概念のレベルで思考を進める能力
- (3) 学習能力。知識や技能を経験によって獲得することを可能にする能力 【世界大百科事典】

知能は流動的知能と結晶的知能の2つに分けられます。流動的知能というものは、基礎的な情報を知る能力ということで、大体この能力というものは20歳ぐらいにピークを迎え、年とともに衰えていくというふうに考えられております。それから結晶的知能というものは、社会的慣習の熟知であったり、知識とか経験といったものの蓄積や的確な判断力が含まれます。これは成人中期を通じて増加し、超高齢期になるとある程度の低下がみられます。

流動的知能と結晶的知能

流動的知能

- ・ 基礎的情報処理能力による



20代にピークを迎える

結晶的知能

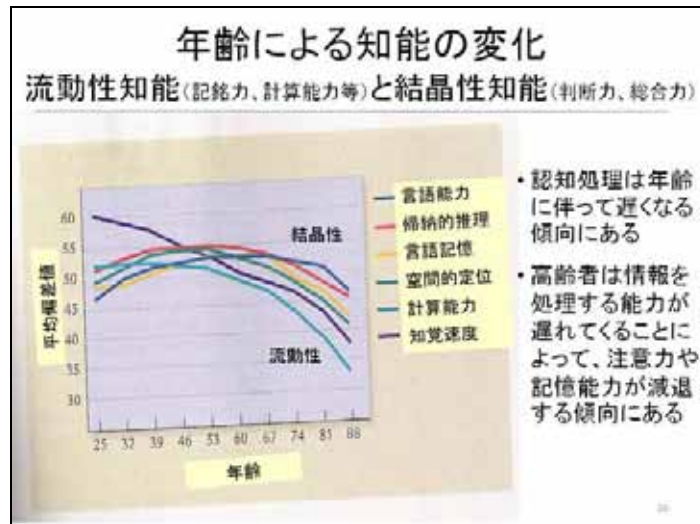
- ・ 社会的慣習の熟知、知識と経験の蓄積、的確な判断力の度合いによる



成人中期を通じて増加する

では、流動的知能と結晶的知能が年齢とともにどういうふうに変わるかということを見ていしましょう。言語能力、知覚能力、知覚速度などが年齢とともにどういうふうに変わっていくかということをお示ししています。この中で特に年齢とともに落ちていきますのは、知覚速度、計算能力のような流動的知能になります。逆に、言語能力や帰納的推理のような論理的に考える能力に関しましては、年齢とともに多少の低下はありますが、急激な衰えはみられません。ですから、高齢者を対象に教える場合は、知覚的な速度が衰えているということもございますので、若い人と同様に

教えてると、何となく違うなというような感覚を持たれることもあるかと思います。認知処理は年齢に伴って遅くなる傾向が出てきますが、情報を処理する能力が遅れることによって、注意力や記憶能力も低下する傾向にあります。これらの変化につきましては個人差があり、必ずしも全員が同様の変化を経験するというものではありませんので、ご注意下さい。



高齢期になると、知能に影響を与えるいろいろな要因が考えられます。まずは教育歴や教育年数です。今の若い世代が高齢期になってきますと、高学歴を持った高齢者が増えてきます。そうすると高齢者のなかでも様々な学歴の違いや知識の差というもの出てきます。現在、生涯学習で学んでる高齢者の中にも、大学や大学院を出られてる方もいらっしゃるかと思いますけども、一方、戦争などで小学校もろくに行けなかったという方もいらっしゃると思います。そういった方々を画一的に教えるというのは難しいということもありえます。ですから、生涯教育を例えば30年後40年後に行う場合に、年齢や学歴などが違う方々を対象に今と同じような生涯教育が使えるかどうかというのは少し疑問点が出てくるかと思われます。

仕事に関しましては、複雑な仕事をされていたか単純な仕事をされていたか、そういったことによっても、どれだけ脳を使ったかということで、学習能力に差が出てくることもあります。毎日の知的生活、これは生涯学習にかかわらず、生活をどのように行っているかということも知能に影響を与えるというふうに考えられます。疾患の既往も影響する可能性があります。心疾患や高血圧といったものを持っているかどうか、うつ状態かどうか、そういったものが知能にある程度影響を与えるかと考えられます。情報入力に関連する感覚障害は、学習の部分でかなり影響を与えるというふうに考えられます。

知能に影響を与えるもの

- ✓ 教育歴(教育年数)
- ✓ 複雑な仕事 vs. 単純な仕事
- ✓ 知的生活
- ✓ 心疾患の既往
- ✓ 高血圧
- ✓ 感覚障害
- ✓ 栄養障害
- ✓ うつ症状
- ✓ 認知機能の急激な低下



疾患について既に話しましたが、高齢期に見られる慢性疾患を幾つか挙げさせていただきます。感覚機能にかかわるものとしては、聴力障害であったり白内障のような視力障害が挙げられます。耳鳴りの症状も生涯学習において気を付ける必要があるかと思えます。小学校や中学校で子供たちにちゃんと座って聞きなさいというと、集中力がないかもしれませんが、取りあえずは学習してるかなということわかります。一方、高齢者の場合は、知覚障害によって学びの場でうまく情報を獲得できてない、もしくは知識を得てないこともありますので、日常生活にかかわる大事な内容であっても、きちんと学ばれてないという可能性もあるかと思えます。

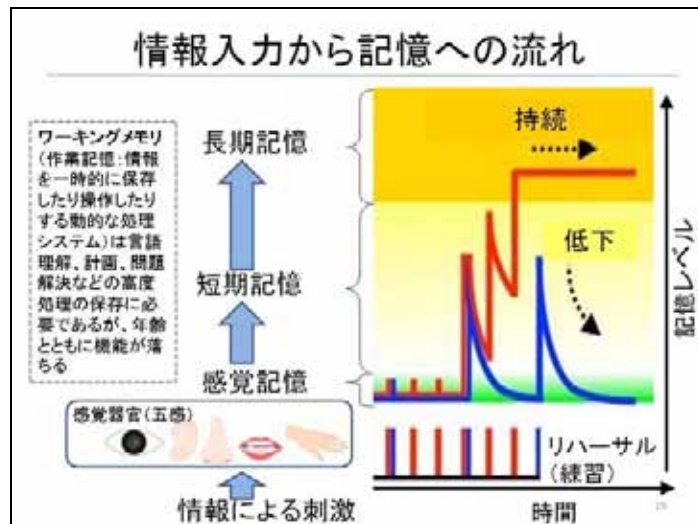
高齢期に見られる主な慢性疾患



■ 関節炎	■ 整形外科的障害
■ 高血圧	■ 白内障
■ 聴覚(聴力)障害	■ 糖尿病
■ 心疾患	■ 視力障害
■ 副鼻腔炎	■ 耳鳴り
■ その他(骨粗鬆症、泌尿器系疾患、消化器系疾患、口腔疾患等)	

では、情報が知識としてどのように記憶されるかについてお示ししたいと思います。まず何らかの刺激によって情報が我々の五感と呼ばれる感覚器を通じて体の中に入ってきます。それが短期記憶として一時的に覚えられたものが、何らかのインパクト、機会、情報のつながりといったものによって長期記憶となって蓄積されます。情報というものは、必ずしも全てが長期記憶につながるものとは限らず、短期記憶のみで終わってしまうことが多いです。これは我々一般成人でも高齢期においても同じように当てはまります。ところが、情報を一時的に保存したり操作したりするワーキングメモリー（作業記憶）と呼ばれるシステムが年齢とともにその機能が落ちるというふうに考えられます。ですので、我々や高齢者においても何か重要なことを記憶するためにはリハーサルという繰り返しの作業をしていく必要があります。特に高齢期におい

ては家の中の事故予防であったり、詐欺という重要な問題について学ぶ際は、繰り返しの学びが良いでしょう。講義の終わりにこういったことを学びましたということでまとめをしていただいたり、ある程度の時期をおいて既に話した内容の要点だけを聞いていただく、前回こういったものを話しましたが皆さん覚えてらっしゃいますかとお聞きしたりして、繰り返しの学びが大切になってくるかと思います。



高齢期における学習の注意点が幾つかございます。記憶に関する要因としては、過去の経験であったり、学んだことが生活に関連しているかどうか、そういったことが記憶に影響を与えます。年齢とともに身体の反応が遅くなる、感覚機能の低下は記憶の低下にもつながるということを注意していく必要があります。

学習と呼び起こしのスピードが遅くなるために、新しい事項や情報検索に時間がかかってしまうことが問題になったりします。

大切なこととして、我々もそうですが、集中力の低下が問題になってきますので、生涯教育の環境の中でいかに倦厭させないかということも大切になります。

高齢期における学習の注意点： 起こりうる変化

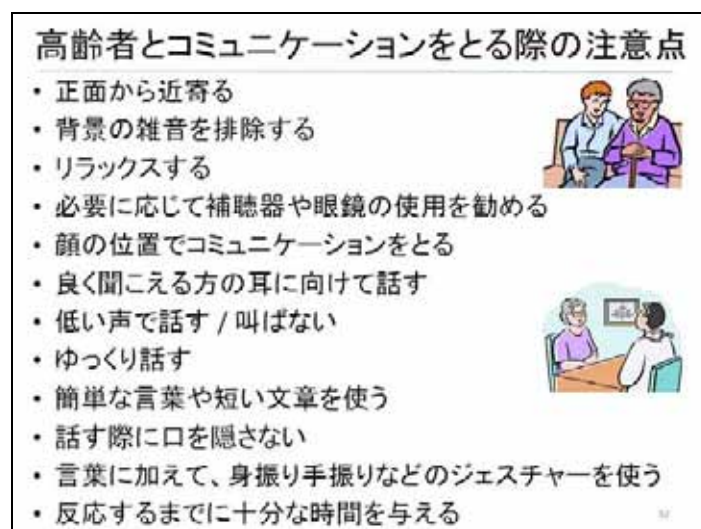
- ・ 記憶に影響する2つの要因：(1) 経験の感情的度合い、(2) 新しい情報が既知の事項に関連しているか
- ・ 年齢とともに身体の反応が遅くなり、思考や問題解決の効率が遅くなる
- ・ 学習と呼び起こしのスピードが遅くなるため、新しい事柄や情報検索に時間がかかる可能性がある
- ・ 短期記憶は必ず衰える訳ではないが、時間を費やす
- ・ 記憶の変化の多くは集中力低下による
- ・ 学習作業の中断によって忘れやすくなる
- ・ 感覚器官(五感)の能力低下が記憶の低下につながる

記憶に影響を与える生活習慣として、幾つかの要因が挙げられます。些細なことであっても、毎日の生活の中で不安とかありますと、学習の低下というものにつながる可能性があります。高齢者におきましては、睡眠障害をお持ちの方もいらっしゃいますが、睡眠不足による疲労によって記憶の低下につながることもあります。ストレスですが、やはり過度になると記憶にも影響してきます。日常の生活の中でも、知的生

活を行っているかどうかによって、やはり学習能力や記憶力に差が出てくるようです。また身体の障害、疾患や病気も記憶に影響を与えることがあります。恐らく生涯学習をお酒を飲んで話を聞きに来られる方はいらっしやらないと思いますが、過剰な飲酒の習慣がある方には、記憶に何らかの影響を与える可能性があります。記憶障害が認知症に直接つながるかどうかは別の話ですので、記憶の低下イコール認知症というふうに短絡的に考えないほうが良いかと思います。



一般的に、高齢者とコミュニケーションをとる際の注意点というものがございます。正面から近寄って話をすることは大切です。雑音をできるだけ省いておくことも必要でしょう。リラックスできる環境というものは大切ですし、眼鏡や補聴器といったものについても個々の対応が必要になってくるかと思います。話すときは、叫ばず低い声でゆっくり話すことも大切です。大事な情報に関しましては、できるだけ短い文章や簡単な言葉を使って話す。言葉に関しましては、ジェスチャーを交えたり、しっかり理解していただくまでに十分な時間を与える、そういったことが大切になってきます。



海外になりますが、アメリカ合衆国の老年学会という大きな学会からコミュニケーションに関してのアドバイスが出ております。交流で大切なことは、我々の中で既に持っている高齢者に対するイメージや偏見について、時に自己評価することが大切です。また、高齢者に対して横柄な態度で生涯学習やコミュニケーションを行ってない

かどうかということも見ていく必要があるでしょう。先に出ましたように、適切なジェスチャーを使ったり、雑音の除去といったものも大切です。記憶のところで少し話しましたが、コミュニケーションにおける反復動作、質問の際はストレスが少ない自由回答であったり、質問の仕方に工夫を凝らすこともコミュニケーションの改善につながるかと思います。

高齢者とのコミュニケーションに関するアドバイス

米国老年学会 (Gerontological Society of America) による

一般的事項: 交流について

- 1 高齢者に対する固定観念に傾斜する可能性を理解し、自己評価を行う
- 2 高齢者に対し、押し付けがましい(横柄な)態度で話すことを避ける

一般的事項: 対面形式でのコミュニケーションの改善について

- 3 自分のジェスチャー(身振り、手振り)の観察、制御を行う
- 4 雑音を極力避ける
- 5 高齢者と話すときは、正面を向いて同じ高さで行う
- 6 重要な内容を伝える際は、文章の構造に細心の注意を払う
- 7 視覚補助(絵、図など)を使い、要点の明確化と理解促進に努める
- 8 自由回答形式の質問をし、誠実に耳を傾ける

Communicating With Older Adults

Guidelines for Health Professionals

次に、「生涯教育」と「生涯学習」を中心に話させていただきます。皆さんの中にはこの2つの言葉の違いについてよく理解されていない方もいらっしゃるかもしれませんので、簡単に説明させていただきます。「生涯教育」というものは我々のような教育者を起点とした考え方で、「生涯学習」というものは学習者である高齢者を起点とした考え方になります。従いまして、「生涯学習」のための条件の整備としての「生涯教育」というふうな捉え方になります。

「生涯教育」と「生涯学習」について

- 「生涯教育」: 教育者を基点とした考え方
- 「生涯学習」: 学習者を基点とした考え方

‘生涯学習の条件整備’としての生涯教育

生涯教育に関しましては、30年以上前の1981年に、生涯教育について中央教育審議会の答申がございました。これは生涯教育にとっての条件整備を行うということが基本的に必要であり、学習支援システムを意味しておりました。それから2006年、生涯学習の理念が、個人個人が学習するための社会環境を提供するということで、多くの関連機関の生涯学習への参加のもと、学習成果を社会の中で生かすことが大切であるとされています。

「生涯教育」と「生涯学習」について

「生涯教育について」 中央教育審議会答申 1981(S56)年

生涯教育とは、国民の一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために、教育制度全体がその上に打ち立てられるべき基本的な理念である。

- ・ 「生涯学習にとっての条件整備を行う」という考え方が基本
- ・ 学習支援システムを意味

「生涯学習の理念」 改正教育基本法第3条 2006(H18)年改正

国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。

- ・ 学習するための社会的環境を提供
- ・ 行政(国や地方自治体)の責務だけではなく、個々人、民間企業、非営利団体などの協力を自ずと得られるような社会
- ・ 学習によって得られた成果を生かすことができる状況

長寿社会における生涯学習のあり方ということで、文部科学省が昨年、長寿社会における生涯学習の在り方についての検討会を開催しております。

長寿社会における生涯学習の在り方に関して



長寿社会における生涯学習の在り方について
～人生100年 いくつになっても 学ぶ幸せ「幸齢社会」～
超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会

文部科学省生涯学習政策局社会教育課

平成24年3月

超高齢化社会の現状や課題、超高齢化社会における生涯学習のあり方、そして生涯学習を通じた高齢者の社会参加などに関する事項等について、学識経験者を集めてワーキンググループを設置し、検討を行っています。



文部科学省「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」

平成23年9月26日から平成24年3月31日

文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課

背景

- ・ 超高齢社会における医療・社会保障費の増大、地域社会の活力の低下、単身老人世帯の増加に伴う高齢者の孤立化等の問題の顕在化
- ・ 国民一人一人にとって、人生90年を前提としたセカンドステージを自ら設計し、主体的に生きる力が求められる
- ・ 継続的な学びを通じて高齢者が地域社会の様々な課題解決に参画し、社会の絆作りに積極的に参加することは、高齢社会の抱える課題解決に資する
- ・ これまでの自治体や民間における「高齢者教育」は、参加者の限定や、世代層によって異なる学習ニーズへの対応が十分提供されていないこと、あるいは、学習者のニーズと行政側が期待する学習内容が異なるなどの課題が指摘されている

検討事項

- (1) 超高齢社会の現状及び課題
- (2) 超高齢社会における生涯学習の在り方
- (3) 生涯学習を通じた高齢者の社会参画の在り方
- (4) その他

学識経験者等で検討会を構成し、その下にワーキンググループ等を設置

その検討会からの報告書では、人生100年時代というものを想定して、今後を考えていくことが必要ではないかということを提言しております。それから、高齢者が支えられる立場ではなく、生涯学習を通じて地域が抱える諸問題を解決する立場や地域社会で主役として活躍できる環境を整備するということが挙げられています。すなわち、学びで得たものを活用して社会貢献をする社会参加型ということを重視しております。

そこで生涯教育には何が必要になってくるかということ、生きがいの創出であったり、地域が抱える問題の解決、それから新たな絆の構築であったり、日常の健康維持、介護予防、そういったものにつながるようなものが大切であると報告されています。

具体的には、学習者である高齢者の参画による協働型学習プログラムの開発と提供、それから学んだ成果が活用できるような仕組みも必要になってきます。高齢者が社会の中で参加し、コーディネーターとして活躍していただくための養成講座の提供も大切になってきます。これらを踏まえて、いろいろな情報発信や情報収集というものが大切になると報告しております。



文部科学省「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」
報告書 平成24年3月26日
文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課

報告書のポイント

- ・ 健康で生きがいをもった高齢期を迎えるために、人生100年時代を想定した人生設計を行うことが必要。
- ・ 高齢者が、社会から支えられる存在ではなく、地域が抱える課題を解決する「地域社会の主役」として活躍できる環境を整備することが必要。
- ・ そのために重要な役割を担うのが生涯学習であり、生涯学習は、「生きがいの創出」、「地域が抱える課題の解決」、「新たな縁・絆の構築」、「健康維持・介護予防」につながる。
- ・ 今後の具体的方策として、「学習者の参画による協働型学習プログラムの開発及び提供」、「成果活用の仕組みづくり」、「コーディネーター人材の養成」、「情報発信・情報収集」が必要である。

高齢者を対象とした生涯学習を牽引するものとしたしましては、まずは人口の高齢化が挙げられます。65歳人口のなかでも特に高い年齢層の急激な増加に生涯学習も対応する必要があるかと考えられます。65歳からの余生の時間をどういうふう to 活用するかということで、生涯教育が大切になってくるかと思えます。また、社会のつながりや社会参加への関心を生涯学習を通じていかに支援していくか。社会に支えられる立場ではなく、地域を支える高齢者として、生涯学習の役割というものが大切になってくるでしょう。

高齢者の特徴については一括りで説明できるものではありませんので、実際に生涯学習を考える中で、学歴の違い、人生経験の違い、興味の違い、社会で大きな出来事を経験したライフステージの年齢の違いなどを生涯学習を提供する側としてどのように見ていくかということが大切になってくるかと思われます。

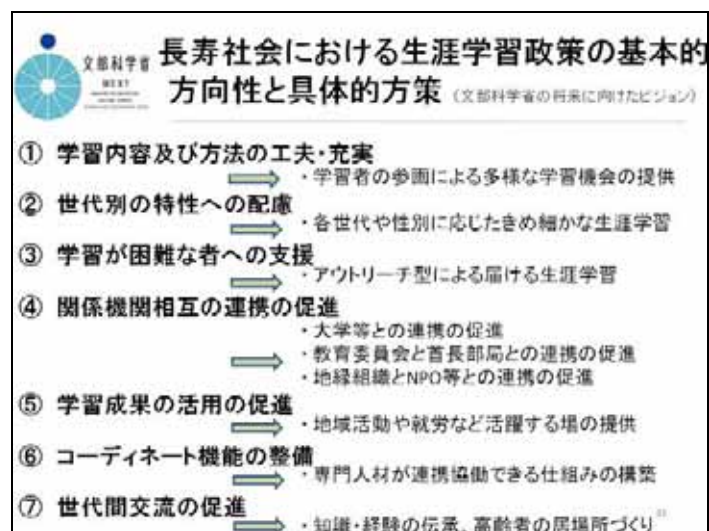
高齢者を対象とした生涯学習を牽引するもの

- ・ 人口の高齢化による高齢者人口の増加
 - － 65歳以上、特に年齢層が高いグループの急激な増加
- ・ 定年退職年齢から余命までの時間活用
 - － 年金受給年齢の上昇にともない労働力としてある程度のとどまりが予想される
- ・ 高齢者の社会とのつながり、社会参加への関心
- ・ 社会に支えられる存在ではなく、地域が抱える課題を解決する「地域社会の主役」として活躍できる環境を整備
 - － 受け身ではなく、提供者として

しかし、高齢者に見られる特徴は一律ではない
－ 学歴、人生経験の違い、年齢幅等

生涯学習政策の方向性としては、7つの点について文部科学省が言及しています。生涯教育に関わる我々も、それぞれの方策については地域で学習する高齢者に合わせて調整していく必要があります。まずは、学ぶ側にいる高齢者の参画も促しながらいろいろな学習機会の提供を考えていく学習内容と方法の工夫があります。世代や年齢、性別に応じたきめ細かい対応も必要になります。次に、学びたくても学べない、学びの場に行けない、そういった方々に、放送大学もそうですが、ラジオやインターネットのような様々な方法、手段を使って、学びを提供するということも大切です。大学であったり地域の機関を活用して学習を促進したり、地域活動や就労、社会参加などができるような場の提供も必要になるかもしれません。

専門人材をできるだけ活用できるようなコーディネート機能の構築、それから知識や経験を沢山お持ちの高齢者を、高齢者だけの場ではなしに、小学校、中学校やまた別の機会で、世代間交流を促進できるよう応用していくことも大事になるでしょう。



実際的な方策としては4つの事項について記載されております。



長寿社会における生涯学習政策の 基本的方向性と具体的方策

(文部科学省のビジョン)

具体的な方策

- ① 高度化・多様化する学習ニーズに対応するため、学習者の参画による協働型学習プログラムの開発及び提供
- ② 学習活動や地域活動に係る情報の収集・データベース化、ワンストップサービスの整備
- ③ 関係機関の連携の下、コーディネーター人材の養成・研修の充実
- ④ 人材バンクや学習ボランティア登録制度の充実、学校支援や子育て支援など高齢者の活躍の場の充実

生涯学習の関係機関に関しましては、いろいろな機関が関与できる可能性がありますけれども、そういったところとも積極的に連携や分担することが必要になってくるかもしれません。各々の関連機関によって連携の仕方というものは違ってくるでしょう。



長寿社会における生涯学習政策の 基本的方向性と具体的方策

(文部科学省のビジョン)

関係機関等の役割

- ① 社会教育施設 → 地域における学習拠点・活動拠点
- ② 学校 → 地域住民の学習活動の支援、活躍場所の提供
- ③ 大学 → 専門性の高い学習機会の提供、リーダー養成
- ④ 民間組織 → 活動機会の提供、意欲と活動のマッチング
- ⑤ 雇用主 → ワーク・ライフ・バランスの推進
- ⑥ 市町村 → 関係機関の連携促進、多様な機会の提供
- ⑦ 都道府県 → 市町村の先導的な施策の支援、条件整備
- ⑧ 国 → 基本的な方針等の策定、地域間格差の是正等

生涯学習政策の報告書の中に、実際に高齢者学習がどういうふうに行われ生かされているかについて、大きく5つの分野にわけて事例紹介がされています。これらは、学習成果を地域の活性化につなげている事例、高齢者が中心になって地域づくりを行っている事例、世代間交流の事例、社会貢献の事例、それから就労の事例です。興味のある方はインターネットを使ってご覧になっていただくとよいと思います。

文部科学省 長寿社会における生涯学習政策の基本的方向性と具体的方策(事例)

① 学習成果を地域の活性化につなげている事例

- ・ チャレンジコミュニティ大学(東京都港区)～60歳以上の人を対象に
- ・ なかの生涯学習大学(東京都中野区)～55歳から79歳までの区民を対象
- ・ くるるセミナー(岐阜県)～

② 高齢者が中心となって特色ある地域づくりを実践している事例

- ・ 東京都江戸川区
- ・ NPO法人すぎなみ学びの楽園(東京都)
- ・ 鹿児島県鹿屋市

③ 世代間交流の事例

- ・ シニアによる絵本の読み聞かせボランティア「りぶりんと」
- ・ NPO法人かながわ子ども教室(神奈川県)
- ・ 高齢者が授業やクラブ活動に参画するコミュニティ・スクールの実践(東京都三鷹市)

④ 高齢者の社会貢献活動の事例 ・ NALC(ニッポン・アクティブライフ・クラブ)

⑤ 高齢者の就労の事例 ・ 株式会社高齢社～(東京都)

事例紹介サイトアドレス
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsfiles/afeldfile/2012/03/28/1319112_2.pdf

2012年に、文科省が生涯学習政策フォーラムを主催しています。東京ではアクティブなシニアとしての生涯学習、鳥取ではイクジイということで、地域社会の中で参加活躍していくということについて話されたようです。

長寿社会における生涯学習政策フォーラム

主 催 : 文部科学省(生涯学習政策局社会教育課環境・高齢者担当)
 後援 : 内閣府、厚生労働省、総務省、東京都

長寿社会における生涯学習政策フォーラム2012in 東京

(背景) 豊かで活力ある長寿社会を迎えるためには、私たちの誰もが生涯現役、アクティブなシニアとして地域社会で活躍することが求められます。そのためには、学習を通して、自分の生き方を見つめ直し、健康で生きがいのある生活を送ることが必要です。

長寿社会における生涯学習政策フォーラム2012in 鳥取

(背景) 地域で絆なイクジイが日本を変える。「地縁」や「血縁」等が薄れつつある現代社会においては、学習活動や地域活動を通じて人と人、あるいは人と地域社会がつながることにより、互いに支え合いながら共生する絆のある社会を構築することが重要です。

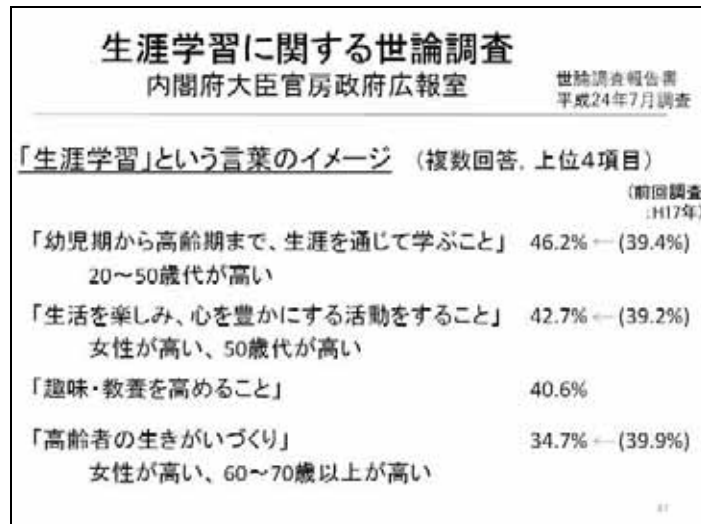
生涯学習に関しては内閣府が成人男女を対象に世論調査を行っています。

生涯学習に関する世論調査
 内閣府大臣官房政府広報室

世論調査報告書
 平成24年7月調査

性・年齢	標本数	回収数	回収率	性・年齢	標本数	回収数	回収率
男 20～29歳	184	89	37.5	女 20～29歳	178	91	51.1
30～39歳	253	131	51.8	30～39歳	233	150	68.2
40～49歳	245	145	59.2	40～49歳	254	172	67.7
50～59歳	215	143	66.5	50～59歳	248	187	75.0
60～69歳	238	221	73.9	60～69歳	325	242	74.5
70歳以上	288	188	65.1	70歳以上	288	210	70.2
計	1,465	865	61.1	計	1,535	1,061	69.1

「生涯学習」という言葉のイメージについて、平成17年と平成24年の調査結果を比較しますと、大体一生を通じて学ぶということをイメージされるのは、20代から50歳代に多くみられます。生活を楽しみ心を豊かにする学習をするということを生涯学習として考えている方々というのは、50歳代に高くみられ、47%ぐらいで増えてきているようです。生活を楽しみ心豊かにすると考えているのは女性や50歳代に多くみられるようです。それから生涯学習を趣味、教養を高める場としてとらえたり、生きがいということで考えている方も多くいらっしゃるようです。



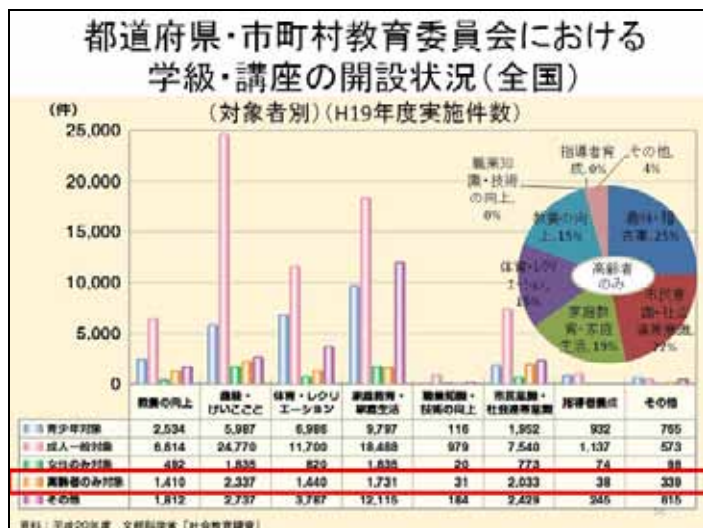
大学が開催する公開講座は年々増えており、年齢別に細かく見ていませんが、全体的に受講者数というものは頭打ちになっている状態です。このまま単純に考えると、1クラスあたりの受講者数が減っているということになります。提供する講座が多様化することによって、受講者が散らばっていることも考えられます。



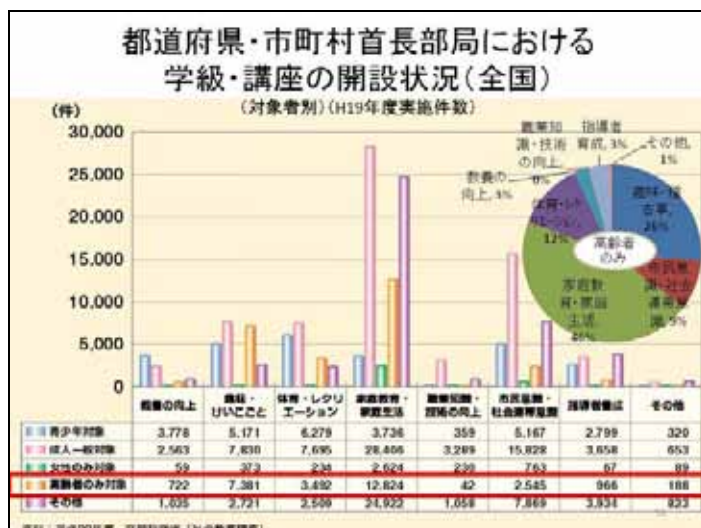
放送大学におきましては、年齢別の内訳をみてみますと、50歳代60歳代の方々がかなりの数で受講されてるようです。



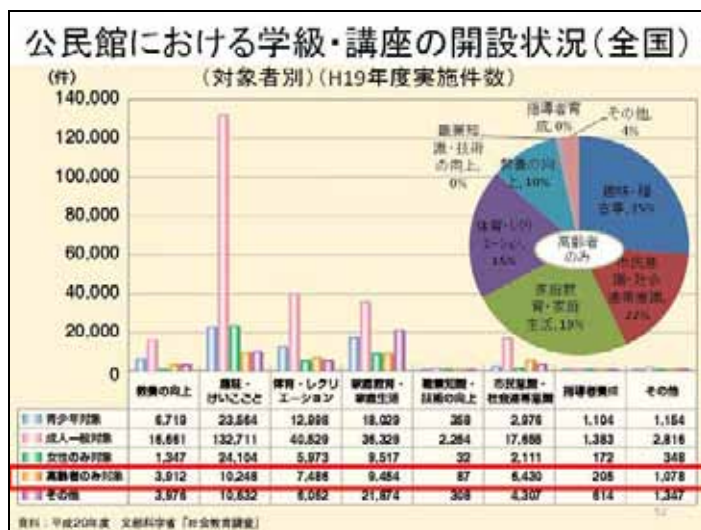
都道府県・市町村教育委員会における高齢者を対象とした学級や講座ですが、趣味、稽古事が25%ぐらいを占めています。市民意識・社会連帯意識や家庭教育・家庭生活といったものもそれぞれ2割ぐらいあります。



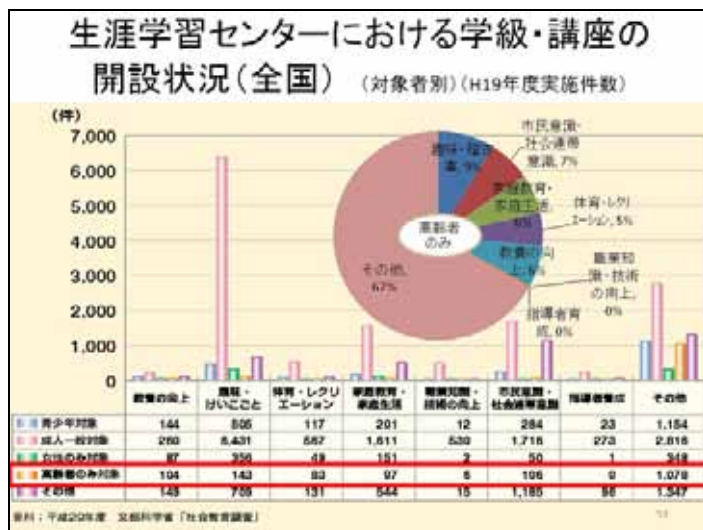
次に、市町村の首長部局における学級・講座の開設状況については、高齢者を見てもみまると、半数近くが家庭教育ならびに家庭生活に関するものです。先ほどと同様に趣味、稽古事というのが4分の1ほどあります。



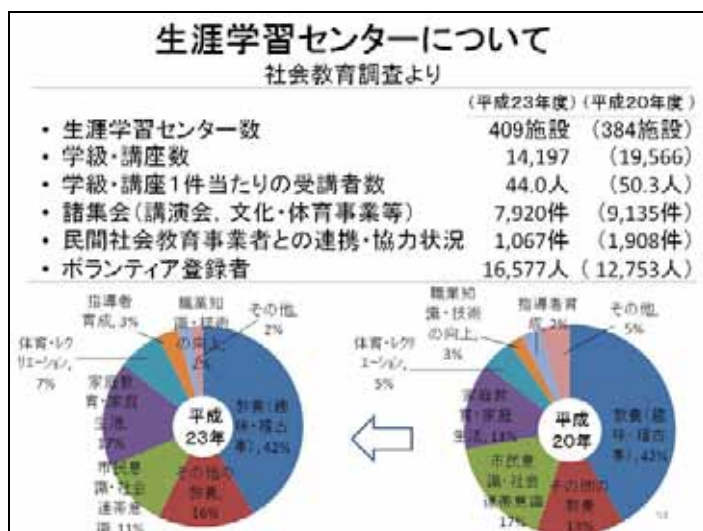
公民館ベースで見えますと、大体同じように、趣味・稽古事、市民意識・社会連
帯意識、家庭教育・家庭生活、体育・レクリエーションといったものへの参加がいく
ぶん似通ってあります。高齢者に関しましても、地域の公民館の環境によって講座の
出され方も違いますし、興味のある高齢者というものも違ってくるような気がいたし
ます。



生涯学習センターにおきますと、いままでと大分様変わりしてる感じがありまして、
その他という部分が3分の2ほどあります。ここではカテゴリーに分類されない沢山の
細かい講座などが提供されているようです。



この生涯学習センターに関する社会教育調査ですが、平成23年度は平成20年度と比べてセンター数は増えていると報告されております。逆に学級・講座数、一件当たりの受講者数、集会数、民間業者との連携は減少しております反面、ボランティア登録者数は増えております。



学習内容別に学級や講座を大別すると、大体8つぐらいのカテゴリーに分けています。皆様の配布資料では2枚のスライドに分けてございます。教育の向上に関するもの、趣味・稽古事に関するもの、体育・レクリエーションに関するもの、家庭教育・家庭生活に関わるもの、職業知識・技術の向上、市民意識・社会連帯意識に関するもの、指導者養成に関するもの、その他に分かれています。

皆様が既に提供されてる講座の中にも、こういったものが数多く含まれるかと思いますが、細かく見ていくと、地域ニーズによって提供されるものが違ってくることがあるかと思われます。

学習内容別 学級・講座数 (その他を含む8分野) 1/2

教養の向上(10)	趣味・けいこ(12)	体育・レクリエーション(10)	家庭教育・家庭生活(14)
・外国語 ・文学 ・歴史 ・自然科学 ・哲学・思想 ・心理学・カウンセリング ・映画鑑賞 ・芸術鑑賞(音楽・演劇等) ・自然観察・天体観測 ・その他	・茶道・茶道・香道 ・俳句・短歌・川柳 ・将棋・囲碁・カルタ ・音楽実技(合唱・演奏・演劇等) ・ダンス・舞踊 ・芸能(日舞・詩吟・民謡等) ・美術実技(絵画・版画・彫刻等) ・手工芸・陶芸 ・工作・模型 ・写真・ビデオ ・パソコン・IT ・その他	・球技(テニス・卓球・バレーボール・サッカー等) ・ランニング ・水泳 ・武道(柔道・剣道等) ・体操・トレーニング・ヨガ・エアロビクス ・ニュースポーツ ・ゴルフ・スキー・スケート ・ハイキング・登山 ・野外活動 ・その他	・育児・保育・しつけ ・くらしの知恵・技術 ・読書・読み聞かせ ・生活体験・異年齢交流 ・健康・生活習慣病予防・薬品 ・料理・食品・食生活 ・年中行事・冠婚葬祭 ・介護・看護 ・生活設計・ライフプラン ・住まい・住環境 ・安全・災害対策 ・洋裁・和裁・編み物・着付け ・園芸(ガーデニング・盆栽等) ・その他

175

学習内容別 学級・講座数 (その他を含む8分野) 2/2

職業知識・技術の向上(8)	市民意識・社会通帯意識(19)	指導者養成(14)
・農業水産技術 ・工業技術 ・コンピュータ・情報処理技術 ・知的財産(著作権等)問題 ・メディアリテラシー ・経営・経理・事務管理 ・編集・制作 ・その他	・自然保護・環境問題・公害問題 ・資源・エネルギー問題 ・国際理解・国際情勢問題 ・政治・経済問題 ・裁判員制度 ・科学技術・情報化 ・男女共同参画・女性問題 ・高齢化・少子化 ・社会福祉(障害者・高齢者福祉・年金等) ・同和問題・人権問題 ・教育問題 ・消費者問題 ・地域・郷土の理解 ・まちづくり・住民参加 ・ボランティア活動・NPO ・金融・保険・税金 ・自治体行政・経営 ・地域防災対策・安全 ・その他	・施設ボランティア養成 ・各種リーダー養成 ・団体育成・運営技術 ・その他
		その他(1)

176

ここで教室のセッティングについて少しお話ししたいと思います。私は今、こういう机の並べ方をされている部屋で話させていただいておりますが、生涯教育というものは、同様のセッティングでされることが多いかと思います。こちらに数枚の写真がありますが、一般的には講師と生徒全体が向かい合う対面形式が多いようです。



高齢者を対象とした生涯教育におきましては、知識や経験豊富な方々の参加も多いかと思われます。そういった方々の知識をできるだけ共有できるような教室のセッティングというものも、場合によっては必要になってくるように思います。教室のセッティングに関しては、部屋のサイズ、開講されるクラスの内容、講師の授業スタイルの好み、生徒数、その他によって変わってきます。

これから米国における教室のセッティングを幾つか紹介させていただきます。これはセミナー形式で、スクリーンが前にあって、講師が演壇で話をするというようなスタイルです。生徒は椅子に座っており、授業のメモをとる必要がなければ、椅子だけで机は必要ないという場合もあります。生徒は正面を向いて、スクリーンを見ながら話を聞かれるというパターンが多いです。

**授業のニーズに合わせて
変化する教室のセッティング**

- ・教室のサイズ
- ・開催クラスの授業内容
- ・講師の授業形式の好み
- ・生徒数
- ・その他

米国における例

- (1) セミナー形式
- (2) 独立形式
- (3) 議会形式
- (4) セミナー形式
- (5) 協同集団形式
- (6) ペア形式
- (7) パートナー形式
- (8) 討論形式
- (9) シミュレーション形式

(1)：セミナー形式

・生徒は椅子に着席し、分離は行わない

・メモを取らな場合は、椅子だけで充分

→ 机は必要がないため、壁側に寄せておく

・講師は、映像を見せる際や生徒が口頭発表等でスクリーン(または黒板)を利用する際、聴衆側に向く

次の独立形式というものは、小学校、中学校とか、そういった義務教育の場面でよく出てきますが、個々に机を離れた机で生徒が各々学ぶ形式の授業が行われます。

議会形式になると、皆さんは余り使うということはないかと思います。講師が前に位置しますが、ディスカッション（討論）に重きをおき、講師だけではなく生徒にもできるだけ話をしてもらおう形式です。視聴覚機器を使えるようにスクリーンが前にあります。

(2)：独立形式

・従来の講師中心のスタイル

・生徒が講義に集中できるように席を離して配置

・生徒が個々に学ぶ

・講師は自由に動き回ることができる

(3)：議会形式

・ディスカッションに重きを置いたスタイル

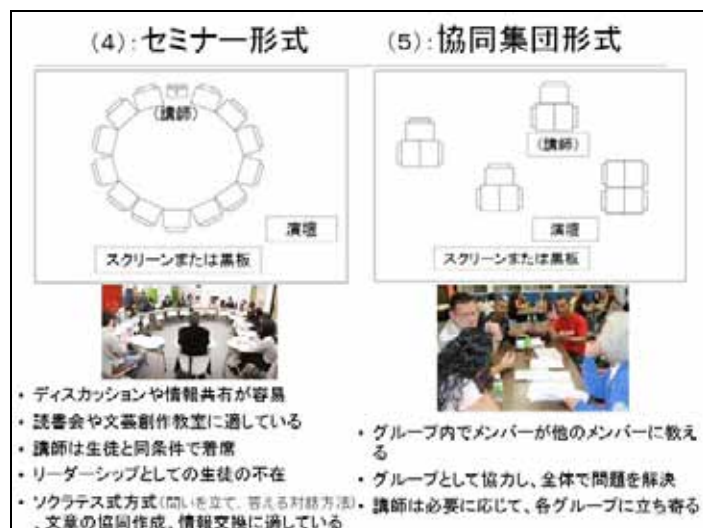
・視聴覚的資料が多用されるケース

・講師は動き回る可能性があるため、演壇は形式的に配置

実際にディスカッション中心の形式になってしまうと、スクリーンはあまり必要になってきません。講師は生徒と同じ条件で着席しますので、講師はあるテーマにおい

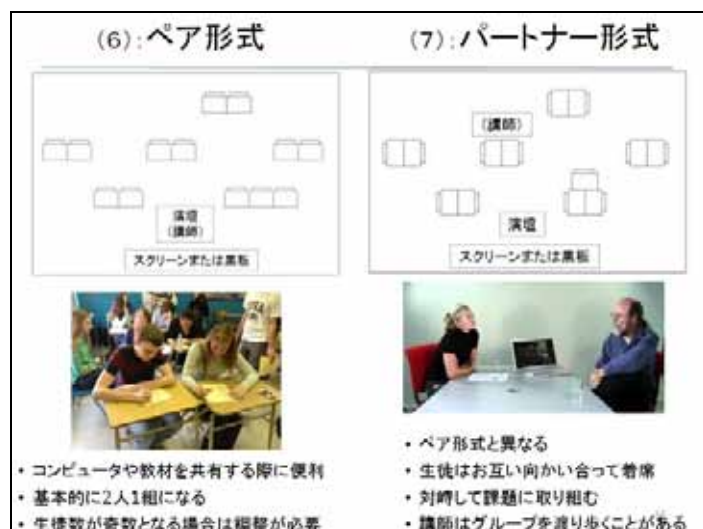
でディスカッションを誘導するような形で授業を行います。高齢者が授業参加をするということでは、知識や経験のある方々が話をする機会が多く出てくると思います。そういったものはこのようなセミナー形式が効果的になります。

何らかのテーマについて小さなグループに分かれて作業や活動していただく場合は、協同集団形式というものがあります。グループの中でリーダーを決めて活動を行いますが、後に全体で各グループ単位の発表を行い、最後にまとめるということになります。



小グループ単位の最たるものの1つとしてペア形式というものがあります。これは隣同士がペアになって、例えばコンピューターを共有してもらうというような一つの作業を行います。

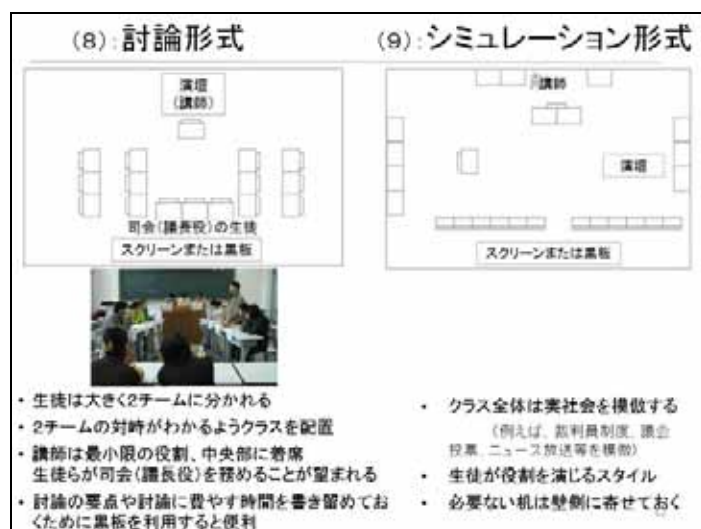
パートナー形式は、何かのテーマに関して1対1で議論してもらうことになります。例えば家事に関する夫婦間の役割というようなテーマが出たときに、男女でペアになってもらい、それぞれでディスカッションを行ってもらい場合に使えるかと思います。いずれの場合も、各グループできちんと協同作業やディスカッションが行われているか確認するために、講師は教室内を動き回ることがあります。



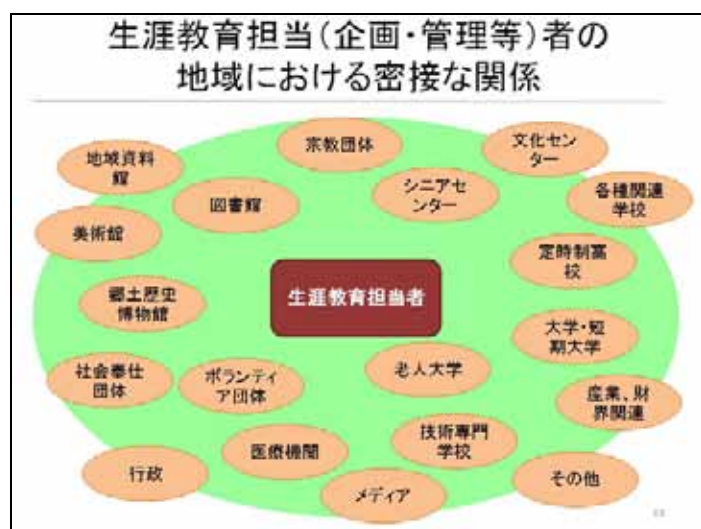
討論形式では、1つのテーマで賛成・反対の立場で2つのグループに分かれて討論していただくということになります。これは、アメリカでは結構ディベートなどでよく使われる方法ですが、物理的に2つのグループに分けたりしますのでテーマによっ

ては、例えば賛成でも反対側のグループに入ることがあります。

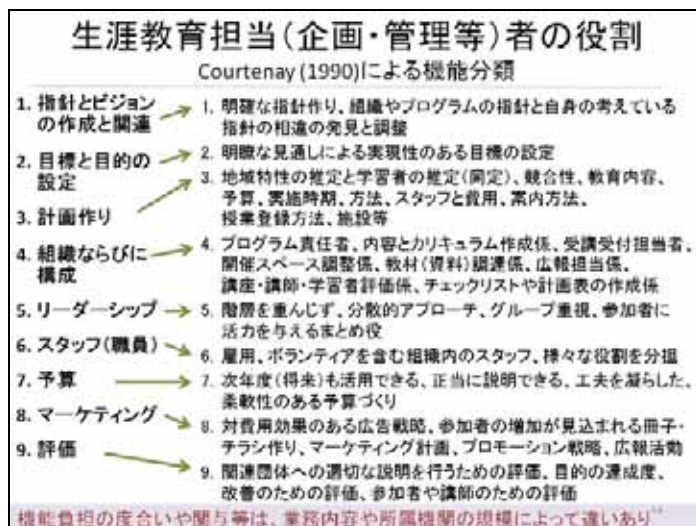
シミュレーション形式は一般的な講義では余り見かけませんが、例えば法廷やニュース放送など、実社会を模倣する形式で行いますが、恐らく日本の高齢者の生涯教育ではあまり馴染みが無いという気がいたします。



地域において、企画や管理などを行う生涯教育担当者は、様々な機関と協働もしくは連携等を通じて関わりを持つかと思います。そういった中で生涯教育担当者の役割というものは生涯教育運営において非常に大切になってくるでしょう。



生涯教育担当者の役割としては、最初に明確な指針とビジョンというものをきちんと立てるとすることが大切です。そこで、実現性のある目標と目的の設定を行います。それから予算や実施時期、スタッフや施設の選定等を含めた計画作りを行い、担当者を決めた組織づくりとまとめ役となるリーダーの選定を行います。その際、高齢者が入ってくることもあるかと思われそうですが、仕事の分担、正規・非正規雇用やボランティアを含めたスタッフ、そして使用目的が明確であるが多少の柔軟性のある予算作りが大切です。参加者を呼び込むためのマーケティングですが、学びたい気持ちがあるが、どこでどのようなことをいつ学べるかというような情報を持ってない方々にアプローチできるような方策も大切になります。生涯学習を実施される場合は、関連団体への説明義務や、引き続き同じような企画を行う際に前回より良いものを提供するために適切な評価を行い、次に生かしていくことが大切になってくるでしょう。



生涯教育プログラムの決定プロセスとしましては、まず生涯教育機関や目的の見直しを行います。情報やデータ収集から、地域にあった生涯教育をどのように構築できるかというところを考えていきます。選択肢が複数ある場合は、優先順位をつけながらプログラムの目標と目的の設定を行い、提供できる教育を策定します。実際にプログラムを実行し、そして評価を行うこととなります。どのプロセスにおきましても評価とフィードバックというものが関わってきます。それは今後の高齢者の生涯教育の興味であったり、地域の特性にあった生涯教育の在り方を考える上で非常に大切ですので、学習者である高齢者や諮問グループによるアドバイスを常に受けていく状態を維持することが必要になってくるかと思えます。



最後になりますが、生涯教育を考えていく中では、地域の特性と多様性をきちんと理解していることが大切です。適切な講座の企画や広報活動を行ううえで、対象となる地域やそこに住んでいる高齢者はどのような特性を持っているのか調べるのが大切でしょう。高齢者の生活のなかでこういった問題が潜んでるのか、課題があるのか、また高齢者がこういった生涯学習を学びたいと思っているのか、こういった内容を学びたいのかなどを調べる必要があるでしょう。提供した講座については、教室の環境も含めて受講者が満足されたかどうか、提供したタイミングや内容は妥当であったか、シリーズで行うのであれば関連するいくつかの講座の順番に問題はないかも評価が必要です。それから、学んだことがどういうふうに関係性に生かされてるか、地域におい

て何らかの変化はもたらされているのか、そういったものも生涯学習のフォローアップとして見ていく必要があるかと思います。そうした人たちが生涯学習でよかった点、物足りなかった点、何かもっと経験できる場の社会の中で、コミュニティの中で活躍される高齢者が、逆に生涯学習を通じて学んだところにアドバイスというかたちでフィードバックすることもできるかと思います。今後5年10年の間に生涯学習を学ぶポテンシャルをお持ちの方々に興味を持たせ、生涯学習の場に来ていただくのか、関連機関と連携を取っていくのかという将来のビジョンを構築しながら生涯教育を支えていくことが大切となるでしょう。

地域の特性と多様性の理解と評価

地域の特性と多様性の評価と理解は、生涯教育プログラムの作成、計画、実施のみならず、適切なマーケティングや広報活動等に良い影響を与える

- ・どのような高齢者が住んでいるのか
- ・地域の特性について(郷土、自然、歴史等)
- ・地域にどのような生活上の問題が潜んでいるのか
- ・どのような高齢者が生涯学習を望んでいるのか
- ・どのような講座の内容を学びたいのか
- ・学びの場から何を得て地域で実行したいのか
- ・将来の生涯教育の展望について
 - 過去の生涯教育の経験から何が生かされるか
 - 現在の受講者が満足している/していないのは何か
 - 将来の地域の特性に変化はあるのか

以上で私の本日の高齢者学習についての話を終了させていただきます。
御静聴ありがとうございました。

(拍手)

【質疑応答】

○司会

上田先生、長時間の御講演どうもありがとうございました。

時間は限られておりますけれども、ここで皆さんからの御質問を受けたいと思います。何か御質問のある方は、所属とお名前を言っていただきましてから、マイクを持って御発言願います。よろしくお願いいたします。

○田中氏

篠山市の中央公民館の田中でございます、よろしくお願いいたします。

質問でございますけれども、超高齢社会における生涯学習のあり方に関する検討会報告書という事項があるんですけれども、その中に今後の具体的な方策として、学習者の参画による協働型学習プログラムの開発及び提供、成果活用の仕組みづくり、そういうふうに書いてありますが、具体的なプログラムの事例みたいなものは、あればちょっと教えていただきたいなと思っているんですけれども、よろしくお願いいたします。

○上田博司 講師

御質問ありがとうございます。文科省の超高齢社会における生涯学習のあり方に関する検討会の報告書の中の具体的方策ということで御質問を受けましたけれども、事例

としましては、そちらのスライドで記載されているウェブアドレスにアクセスしていただくと事例としまして、いくつかの特徴を持ったグループが地域の中でどのように活動されているかということを紹介されています。その他では、学習者の協働参画ということで、確か桜美林大学の先生（瀬沼克彰教授）が生涯学習ということで幾つか国内の事例を書籍のなかで紹介されてたように見受けられます。

○司会

よろしいでしょうか。

○田中氏

ありがとうございます。

○司会

時間が押しておりますので、どうしてもという方おられましたらもうお一人、どなたかおられますでしょうか。

よろしいでしょうか。

上田先生は、もしお時間が許せば、午後の意見交換会、情報交換会もちょっと回っていただいて、皆さんの討議をお聞きしたいとおっしゃっておりますので、そのときにうまくいけば何かいいアドバイスが聞けるかもしれませんので、質疑応答の時間はこれで終わりといたしたいと思います。

皆さん、上田先生にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。

（拍手）

○司会

どうもありがとうございました。

○上田博司 講師

あの、私の方から一つお願いがあるのですが、昼からの皆さんの話し合いの中でアドバイスをいただけてくださいというふうに話されましたが、逆に私は昼から参加し現場の声をできるだけお伺いして将来に生かせるようにしたいと考えております。そういった意味で各グループを回らせていただきますので、本日の講義の批判であっても構いませんし、いろいろなご意見を頂戴できればと考えております。よろしくお願いいたします。

（拍手）

○司会

どうもありがとうございました。

それでは、この後、昼食の後、13時から意見交換となりますので、所定の会場のほうに移動していただきまして、14時40分までにこの会場、第1研修室のほうにお戻りいただきたいと思います。

進行役5人の方、まことに申しわけないんですけども、全員ちょっと連絡しましたように、12時45分にここに集まっていただきまして、簡単な打ち合わせをさせていただきますと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、13時まで昼食休憩といたします。

どうも御苦勞様でした。